慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	『風流線』の一考察：巨山五太夫のモデルについて
Sub Title	
Author	秋山, 稔(Akiyam, Minoru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	1985
Jtitle	三田國文 No.4 (1985. 10) ,p.40- 47
JaLC DOI	10.14991/002.19851000-0040
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-19851000-0040

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『風流線』の一考察

――巨山五太夫のモデルについて

秋山　稔

『風流線』（「国民新聞」明36・10・24～明37・3・12）は、その続篇である『続風流線』（同、明37・5・29～10・5）と併せて泉鏡花の最大の長篇小説である（以下、続篇も含めて『風流線』と呼ぶ）。鏡花の郷里である金沢及びその周辺、殊に手取川流域を舞台として、波瀾に充ちた展開を示すこの作品の主筋は、北陸線の鉄道工事監督技師水上規矩夫と友人の哲学者村岡不二太の率いる「風流組」なる、叛骨精神を持った工夫の特異な集団が、貧民救済を名目として私腹を肥やす偽善者、巨山五太夫とその取り巻きに反抗を挑む点にある。小稿は、このような作中の〈悪〉を体現するといって良い巨山五太夫のモデル及び『風流線』の執筆契機について考察を加えるものである。

1

年配四十有余、商とも見えず、工とも見えず、農とも見えない、面に大人の風あつて、身装は山家を其まゝの、雑と是村夫子。

（岩波版『鏡花全集』巻八。以下鏡花作の引用は、岩波版全集による）

『風流線』冒頭に登場する巨山五太夫の外貌である。その巨山は、「城下に、貧窮人の、お救小屋を立ててお在なさる」「篤志の大慈善家」として周囲からもてはやされているのだが、これ以前に、同じ金沢及び周辺を舞台とした作品『湖のほとり』（「新小説」明32・4）の中で、鏡花は「浦島の殿様」という人物を次のように描いている。

国内随一の大長者で、且つ徳望家で、又未曽有の慈善者で、あらゆる乞食を救済して、之を養ふ者数を知らず、城北の野に矮屋八十六棟を有して、養育院と称へてある。

（『鏡花全集』巻五）

両者共、困窮者を施設に収容し、救養している点において共通し、浦島は巨山の先蹤とみて良い。明治期の金沢において、このような慈善活動を行なった人物として指摘できるのは、小野太三郎である。『金沢墓誌』（和田文次郎編、加越能史談会、大8・6）には、

太三郎人となり温良恭謙慈愛の心厚し廃藩の際盲者二十余人

を己の家に収養し後家屋六棟を購ひ窮民二百余人を収養し之と衣食を共にし独立経営し遂に藍綬褒章を賜はる財団法人小野慈善院新に成るに及び推されて其院長となる明治四十五年四月歿す享年六十七[1]

（「宝円寺」の項。俵屋宗達も同寺に眠るという）

とある。又、『金沢市史』現代編下巻（同市刊、昭44・5）収載の略歴を引けば、以下の如くである。

天保二・一・一五
　金沢市中堀川町三一番地に生れる。
嘉永五
　藩の小者に採用され扶持米七合をうける。
　（維新時）　古着商を営む。
元治元
　自宅を困窮者のために解放する。
明治六
　木ノ新保に家を求め困窮者を収容する。
明治一二
　彦三二番丁七に再び家を購入し困窮者を収容する。
明治一八・二
　藍綬褒章をうける。
明治三九・一〇
　財団法人小野慈善院の理事となる。
明治四五・四・五
　七三歳で死去。

以上の墓誌及び略歴によって、小野太三郎が『湖のほとり』の浦島、『風流線』の巨山五太夫のモデルであることが推測されるのである。

管見によれば、小野太三郎に関する主要な文献には、

(1)『小野君慈善録』（和田文次郎輯、共潤会発兌、明23・8）
(2)「貧天地主小野太三郎氏」[2]（荘司生「北国新聞」明28・9・10～15、17）
(3)「北陸の慈善家」（天涯茫々生「毎日新聞」明30・6・25、26『日本の下層社会』教文館、明32・4所収）
(4)『現今北国人物志』初編（北光社編輯、和田文次郎発行、明36・7）

がある。(1)は、「慈善ヲ奨励シ、徳行ヲ表彰スルヲ以テ目的ト為ス」共潤会が、記者の和田文次郎に委嘱して小野太三郎の履歴と貧民救養の実態を詳述したもの。(2)は、前々年に刊行されて評判をよんだ都市下層民のルポルタージュ、桜田大我『貧天地饑寒窟探撿記』や松原岩五郎『最暗黒の東京』等に促されたと推測される小野太三郎訪問の連載記事。(3)のみが地元金沢以外の文献で、天涯茫々生と横山源之助が滞在先の金沢で「加州の三人物」の一人として「金沢人にして知事の名を知らざる者あるも小野氏の名を知らざるものなし」と聞いて興味を抱き、その居所を訪ねた記事。上下二章からなり、前半では(1)によって小野太三郎の閲歴を記し、後半では慈善事業の概要を記している。(4)は、百八十余名の石川県内各界の知名人士の略歴を収めた書の一節。発行者の和田文次郎は(1)の執筆者でもあり、実質的には(1)のダイジェストに明治三十六年現在の状況を若干加筆したものである。以上の文献によって、小野太三郎の慈善事業について検討すれば、その実態は次のように整理される。

小野太三郎の収容施設は、「小野救養場」(4)では「小野慈善院」と呼ばれ、彦三二番丁（二棟）、木ノ新保、堀川開ノ町、石屋小路各一棟の六ケ所七棟存した。(2)によれば、炊事場、陶器製造場、木綿機織・糸操、裁縫の四つの「工場」があり、裏手には、頻死の「流行病患者」を収容する小屋があった。収容人員は、(1)二百四十有余名、(2)百八十名、(3)六百四十余名、(4)二百五十余名となっている。(3)が際立って多いが、前引『金沢市史』によれば、明治三十三年が二百二十七名であることから、直接収容する者の他に「其の家に在りて、日々幾分の補給、又は全部の贍給を君に仰ぎて、以て生活しつゝあるもの」(1)による）を含めた人数と考えられる。収容者の出身地は県内外各地に渉り、その七八割は老幼者で、身寄りのない者・癲癇病者・出獄人、さらには一夜の宿を求める巡礼六部もあった。又、収容者で労働可能な者は、人足・車夫・按摩・機織・養蚕・大工・陶器作りの他、煙草・飴菓子・八百物・玩具を行商したり、笠紐縫や肥料売買に従事し、十五～五十銭の日当を与えられた。救養場には「一ト小屋」ごとに取締人が置かれ、入所希望者から事情を聞いて可否を決める他、諸物品の保管、救養者の監督、特に就業者が帰る度に所持品を調査し疑問点を糺して太三郎に報告すること、各自への報酬を毎日調べて人別帳に記載し、金銭と共に太三郎に届けることや病人の看護等にあたった。又、報酬の一割に一人一律二厘を加えた金額を貯金して衣料費と自立資金とし、他は食料費とした。食料は、当初は「常人の食」であったが、米価の騰貴した明治二十二三年以後は、金沢衛戍連隊の「残肴餕飯」の払い下げをうけた「濃粥」で、後年(4)に至ると監獄署の残飯と南京米が加えられている。

なお、(2)は、救養場は東京の万年町や大阪の松島町のような市街地の中ではなく、「金沢市街の北端に偏し」林檎・梅・桑等の樹木が植えられ、小屋の間には畑があって衛生上の好位置にあるという。しかし、実際には、救養費は「氏の所有なる千歩ばかりの田畝」からの収入と「健全なる被養者が労働して得たる額」の幾分かのみで、「時々同感者より得る特志によりて僅に一日を支ゆるのみ」という経済的基盤の弱さから、「常に有り合せの襤褸（つゞれ）」をまとった収容者の生活環境は、すでに(1)の明治二十三年の段階から「陋隘にして檐壊（やぶ）れて月敗床を照らし庭荒れて蛇破壁に栖み」という状態であった。(3)(2)の荘司生が、

揃はぬ下駄に肩ぬけたる単衣着て貧乏徳利の大なるを提げて醤油買に飛出でたる、瓢箪形（な）りに成って車井の水酌める、数百の沢庵を相手に桶中に合戦する女共、大竈の前に粗朶くぶる男の顔炭団よりも黒く、塵運ぶ男顎下に仮りの鬚を垂るゝ

というように描く救養者の生活は、桜田大我や松原岩五郎の記す都市下層民のそれとさほど隔ったものではない。

小野救養場に関する右の整理、小野太三郎の人となりその他四文献の記す所と、『風流線』との照応を辿り、摂取の実態を検証すれば以下のようになる。

まず、本章のはじめに引用した巨山五太夫の「大人の風ある」「山家を其まゝの」「村夫子」という外貌についてである。(3)では横山源之助の前に現れた藍綬褒章受賞者の風采を、

跣足にて汚れたる短き股引に、同じく汚れたる襯衣一枚の一野夫

と記している。(1)にも「識らざるもの往々誤て傖夫野人となす」と

あり、同じ(1)の「君の人となり（中略）隠然長者の風あり」を付加すれば、五太夫の外貌と重なるものであることは言うまでもない。(2)では「敝衣垢裳」と述べるが、そこまでの姿は五太夫にはなく、その点では外見上の美化がなされている。又、さらに具体的には「身体の小さな、小肥の赭ら顔で、五分刈、白髪まじり（中略）帯の下の太ッ腹、素足に穿いた藁草履で、地から生えたやうにづいと極めた」巨山五太夫の姿は、(1)の巻頭に掲げられた小野太三郎の肖像（第三回内国勧業博覧会に出品）や「広額大耳、頰嗇にして唇豊、眼は曽て障を疾みたるを以て烱々たるを見ず」（(1)による）から直接伺い知ることはできない。

巨山が、「平生自分自らも、小屋の貧民と同様なものを食つて、起居を一ッにせらるゝ」点は、前に引いた『金沢墓誌』の「窮民二百余人を収養し之と衣食を共にし」に合致することは明らかだが、巨山が営むお救小屋は作中の記述をまとめると次のように描かれている。

お救小屋に収容された困窮人は、「皆それぞれ勤（つとめ）をしなければならない。その職種は、左官・大工・草刈・日庸の他、九谷焼の絵付があり、「小屋から出ます商人」という一節に伺えるように行商があり、さらに女は、巨山夫人美樹子の実家の経営する製糸場へ通う。又、各自の仕事先まで監視に来る「お小屋づきの役人」が置かれ、賃金は「係りの役人」へ差し出し「悉皆巨山が取上げる」ことになっている。食事は、「兵隊屋敷の残飯を買込んで」作った「どろどろの粥」で、不始末が露顕すると削減されるので、「宛然活きながら地獄の境界、今時の懲役同様」である。

幾分かの脚色と誇張はみられるものの、その裡にかいまみられる就業者の職種・収容者を監視監督する者の存在・賃金の処理・食事等については、多分に小野救養場をふまえているのである。又、「小屋ものと見れば汚らはしさうに、戸外で逢うても遠くから避けるやうにします」という収容者に対するいわれなき偏見も、(2)で荘司生が、

曩日余の小野氏を訪問せんとするや、袋町に下車し行人を止めて氏が住所の方向を問ふ、告ぐる人皆先づ余を冷視し嘲笑の裡に教示すること比々然らざるはなし

と指摘する「市人の貧天地に対する感情」を剔抉したものとみて良い。この他、警部長十時猛連が「巨山と共謀になって貧窮人でも乞食でも、片端からお救小屋へ掬ひ込む」というのは、(2)の「警察署も（中略）時々始末の付かぬ難病者を我が貧天地の厄介に頼まるゝ」という小野太三郎の言や収容者に出獄人も少なくない点等から伺われる、小野救養場と警察との関係に基づいているものとみられる。さらに、「国中の道徳の亀鑑になって居る巨山が、実際恐しい人非人」であることを暴露する「救小屋非人控」についても、(1)にいう「君ハ『貧民救助簿』と題したる簿冊一二を蔵す」、あるいは(2)の記者の見た「元治頃養育せし貧人の姓名薄」や拝見を所望せんとして遠慮した「日々の出入薄一覧」のいずれかの存在が知られていたと推測される。

又、巨山に対してしばしば「活如来」という尊称が用いられているが、この呼称は、例えば明治十三年十月十五日付「朝野新聞」の東西両本願寺大教正が金沢へ下向する旨を伝えた雑報に

加越能三州の真宗信者は生如来を拝まんと待ち居る（傍点、引用者）

とあるように、本願寺法主に対する語として用いられている。(1)及び(3)によれば、明治二十二年六月に太三郎は東本願寺法主大谷光勝より親染和讃々文付六字名号一幅を、又その妻には黒柿菊総念珠を贈られ、同年九月専光寺での窮民追弔会にこれを展示し、金沢の貴顕縉紳五百余名の参会をみたという。このように、太三郎と法主との結びつきは、当時強く印象付けられていたのであり、「活如来」の呼び名は、こうした経緯に起因して付会されたものと考えられる。付言すれば、鏡花戯曲の秀作『夜叉ケ池』において「本願寺派の坊主」である山沢学円のいうように越前から加賀にかけての一帯は「真宗門徒の淵源地」であり、巨山の別荘芙蓉館のある手取川流域は、作中鉄道工夫の集団が十時ら警官隊と対峙する地点でもあるが、かつて加賀一国を支配した門徒衆の数々の合戦の舞台であったことにも留意するべきであろう。(4)

その他、続篇において特に鮮明に巨山の好色漢としての裏面が描かれるわけであるが、(1)によれば、太三郎は島谷仙なる現夫人の前に「妻を迎ふること実に七人」であった。「皆其操に合はず、醜汚を言となして去」ったとしても、小説としての脚色を加える時にこうした側面を取り入れたものと考えられる。なお、巨山は「たとひ情が仇となって、身が八裂になりませうとも、慈善事業は止められません」と述べているが、それが作中では偽善者の虚言だとしても、ここには例えば明治初期の石川県知事内田清風の日記の明治十一年の項にいう、救援米の寄付を求めて二日間飲まず食わずで県庁前に座り込んだというような、慈善に生涯を費した太三郎の面目が写されているとみられる。(5)

以上のように、小野太三郎に関して、人となり及び窮民収容施設を中心とした記述において、『風流線』の巨山五太夫と多くの点で照応がみられるのである。従来モデルとしては銭屋五兵衛のみがあげられてきた。『湖のほとり』においては、五兵衛の名がみられ、「八田潟」が五兵衛に由縁ある河北潟を想起させる点からその面影を否定できないとしても、如上のように、特に『風流線』においては内実からみる限り、小野太三郎を主要なモデルとして考えるべきである。

しかし、『風流線』には太三郎について伝えられる所と無縁あるいは異なる点も、当然のことながら少なくない。襤褸をまとった小野救養場の収容者が、これみよがしに「博愛」の文字を草色の筒袖の襟に染めているという記載は、太三郎関係の文献に見い出すことはできない。これは、「風流組」の工夫の紺地に「風」又は「流」と青く抜いた半被に対比的に配した創作である。巨山に対立する鉄道工夫にしても、(3)に救養場の就業者について「当今人足は鉄道工事に赴ける者多く」と記しているように、逆に小野太三郎の許から工事の人足を出しているのである。又、巨山が傾斜地蔵の屋根や山宮村入口の橋を寄進したという点に関連する記事も、一切見られない。太三郎自身は、家屋六棟を購入した明治十二年頃にはすでに「家産殆ど尽く」状態で「聞えた大分限者」というのは誇張である。太三郎夫人とその実家についても、巨山夫人美樹子と重なる点は皆無である。これらの点については、他のモデルを想定しうる可能性があるが、後考によらざるを得ない。

次章においては、『湖のほとり』を含めて、小野太三郎をモデルとした作品の執筆契機について考えることとする。

2

鏡花が、小野太三郎をモデルとした作品を執筆した最大のきっかけは、前章に引いた横山源之助「北陸の慈善家」に接したことであったと推測される。『日本の下層社会』が刊行されたのが、『湖のほとり』の発表と同じ明治三十二年四月であるから、鏡花は、源之助の記事を「毎日新聞」の初出で読んだことになる。「北陸の慈善家」は、明治三十年に阪神方面の労働事情調査に向かう途次金沢に滞在した際の産物で、同年六月二十三日付の「金沢瞥見記」に続く連載記事の一つである。当時横山源之助は、松原岩五郎に続く下層社会のルポルタージュ作家としての地位を確立し、天涯茫々生の記事は「毎日の呼物」[6]であった。鏡花が下層社会に深い関心を抱いていたことは、『怪語』『夜行巡査』の一節の他、松原の『最暗黒の東京』を『貧民倶楽部』に取り入れていることにも明らかである。[7] 鏡花と同じく晩年の樋口一葉との交流を持つ一方で、観念小説の鋭い批判者でもあった源之助[8]が、故郷金沢を採り上げたのであるから、鏡花が「金沢瞥見記」以下の連載記事に目を向けた可能性は、かなり高いと考えて良い。

「北陸の慈善家」において源之助は、太三郎を「極めて謙譲、深く自己を吹聴するを避くる」人物であって、「紙より薄き当今の人情社会に於て（中略）寔に異数」であると規定し、「都会の人よ、記臆せよ、北陸の一大慈善家なる小野太三郎氏は斯くの如き人なり」と結んでいる。こうした観点からみれば、太三郎はまさに『風流線』で巨山夫人美樹子が夫に望む「国中の道徳の亀鑑」以外の何者でもない。しかし、これと『湖のほとり』で後作の水上規矩夫に相当する畠山猛が加賀言葉を中傷しつつ「此国の奴等、（中略）僕は土着だけれども、大嫌だ。癪に障る」と言ったあと、

浦島が何だ、畜生、那の偽善者が何だ。然云ふ盲目だから駄目だつていふんだ。

乞食を養つときやあ、慈善者だと思つてる。（中略）第一君、奴に三舎を避けて、馬車に敬礼しなければ、市民が一致して知事を追出し兼ねない人望だ。

という浦島及び金沢市民への怒りとの落差は甚大である。本性を見きわめえない意味で用いられている「盲目」とは、あるいは、横山源之助にも向けられていたかもしれない。源之助の記事に接する約一年前の明治二十九年五月に郷里から祖母と弟を迎え、金沢を完全に引きはらって東京は小石川区大塚に居を構えていた鏡花にとって、小野太三郎は、源之助とは全く異なった姿に映じていたことはほぼ疑いないのである。

上述のように、太三郎は、鏡花の生れた明治六年に木ノ新保で窮民収容事業を始め、同十二年に彦三二番丁に六棟の家屋を購入して本格的な救養を行なったのであるが、彦三二番丁は、鏡花の生まれ育った下新町のごく近隣（下新町に続く上新町の向いが彦三二番丁である）に位置しており、幼少期から鏡花は「四壁蕭然」として「人の堪えざるところのもの」という「小野救養場」の実態を知っていたとみて良く、巨山五太夫のお救小屋にそれが反映されていることは、前章に確認した通りである。ここで、小野太三郎個人について藍綬褒章受賞後の記事を『小野君慈善録』から拾うと、明治二十一年十月曹洞宗僧侶が大乗寺で「小野救養場」の窮民死者慈善追弔会を開き、太三郎は百余名の収容者を率いて赴いた。同二十二年

二月共潤会は、帝国憲法発布拝賀式及び第一回窮民賑恤会、小野太三郎名誉表彰会を金沢市公会堂に挙行した。四月には曹洞宗大本山賜紫法雲普蓋禅師より本山紋付の金襴打舗と扇子が、又六月には東本願寺法主より六字名号一幅が太三郎に贈られた。九月に太三郎が専光寺に主催した窮民死者追弔会には、五百有余名の貴顕縉紳が参集したことはすでに述べた。同二十三年二月紀元節に共潤会は、建国二千五百五十年祝賀式と第二回窮民賑恤会を金沢市公会堂に開き、太三郎を招いて米五斗と拾塵車二輌を贈った。四月には、吉田好二撮影の太三郎の肖像写真が略歴を添えて上野で開会した第三回内国勧業博覧会に出品された。六月には、船越衛石川県知事が救養場を訪問し、家屋修繕費十五円を贈った。七月に設立された共立慈善会は、救養資金として会員の喜捨物を太三郎に贈ることに決定した等々――というように枚挙にいとまがない程に、太三郎の名誉と人望を証明する記事が存する。特に、金沢での帝国憲法拝賀式が太三郎の名誉表彰会を兼ねていたことや内国勧業博覧会で太三郎の紹介がなされたこと等は、その名声を内外に喧伝し、高からしめたに相違ない。これらの記載から、当時の鏡花の眼に映じていたのは、貧民救済と引きかえに倍加する太三郎の名誉と、主として「外聞」と「世間体」からそれを支える金沢の貴顕縉紳の姿であったと推察されるのである。

このように「小野救養場」が脚光を浴びた背景には、明治十七年六月以後、ほぼ毎年鹿鳴館で「婦人慈善会」が開催され、貴顕紳士淑女の間で慈善に対する関心が高まったことの他に、明治二十二三年の天候不順による凶作で米価が急騰し、全国的に窮民が増加するといった当時の世相があったと考えられる。『金沢日本基督教会五十年史』（中沢正七編、同教会発行、昭5・9）によれば、明治二十三年には金沢でも餓死寸前の細民四千人を生じたため、六月から九月まで同教会は浅野河畔において施米したという。窮民問題は、当時無視しえない重大な問題であり、それが深刻化すればするほど、それだけ太三郎は注目され、名声を博すこととなったのである。太三郎への顕彰が旺んであった同年十一月に尾崎紅葉門下生たらんとして上京した鏡花にとって、小野太三郎はしたがって窮民を破屋に収容して自らは名誉と人望を獲得した人物として、脳裡に刻みつけられていたろうことは想像に難くない。

以後、鏡花は新進作家として認められた明治二十八年六月から九月まで金沢に滞在しているが、その九月に荘司生「貧天地主小野太三郎氏」が「北国新聞」に掲載されたのであり、鏡花はこれを読んで小野太三郎についての記憶を新たにしたと推測される。こうして、明治三十年六月、東京に於いて鏡花は、天涯茫々生の記事で小野太三郎に再会するのである。その認識の隔たりが、やがて『湖のほとり』を書かせ、さらに最大長編の『風流線』執筆へと鏡花を導いたと考えられる。

なお「北陸の慈善家」に先立って発表された「金沢瞥見記」は、百万石の金沢には「別に称すべき工業なく」「生産の方面より見れば」十万石の富山に劣り、労働者の困窮も甚しいと指摘し、鉄道工夫にも言及した後次のように結末を記している。

百万石喜ぶべし悪むべからずや、今や数年ならずして鉄道は敷設せられん、金沢人士能く之に対する覚悟ありや、記して百万石の読者に質す。

鉄道開通間近にもかかわらず（北陸線が金沢に通じたのは、十ケ

月後のことである[9]、没落士族を抱え[10]かつての百万石の栄光に固執して、産業振興に消極的な金沢人士の因循な閉鎖性を撹つ挑発的な意味合いを帯びたこの結びは、談話「自然と民謡に」（『日本及日本人』大4・10）で、「加賀の人間は（中略）頑固で分らず漢で（中略）百万石だぞと云った偉らがりが」（『鏡花全集』巻二八）面白くないという「加賀っぽ」嫌いの鏡花の共感する所であったろう。それは、先に引いた畠山の言葉や『風流線』で水上規矩夫が故郷に対して反感を抱く理由としてあげる「因循姑息」以下の言辞とも関わりを持つものである。

このようにみてくると、「金沢瞥見記」における鉄道敷設への挑発的な意義付けや鏡花の故郷の人々への見方等の共通点の存在は、「敷設せられん」とする鉄道に対する金沢人士の「覚悟」を問う作品ともいえる『風流線』の構想、換言すれば、工事中の鉄路を「恐るべき大蛇」に化身せしめて、「一度鉄道が渠等（引用者注、金沢人士）の眼界に顕るゝ時」化身した大蛇が「山野を圧して、巨頭其の頭に臨むべく」感じさせて、故郷への「不平を洩し、怨恨を霽し、仇に報いむ」とする鏡花の作品世界にも影響していると考えうる。

以上のように、偽善者及びその一派と、それに対立するに故郷に怨恨を抱く指導者を仰ぐ鉄道工夫の集団を配置するこの作品の基本的な構図の源泉は、「金沢瞥見記」から「北陸の慈善家」へと続く横山源之助の連載記事から汲んだものとみられるのである。

右に述べてきたように、『風流線』の巨山五太夫の有力なモデルである小野太三郎及びその窮民収容施設は、鏡花の生まれ育った近隣にあって、幼少期から目にしてきたものであった。その実態は、後年新進作家鏡花に下層民に取材する視野を与えると共に鹿鳴館の「婦人慈善会」をはじめとして全国的に盛行した、明治二十年代を中心とする慈善運動に欺瞞の目を向けさせ、『貧民倶楽部』その他の初期文学の重要な作品に結実する一因となったと思われる。これらの作品の集大成である『風流線』の執筆には、横山源之助の小野太三郎を中心とする金沢でのルポルタージュが大きく関わっていることが推察されるのであるが、こうした横山源之助受容は、現実社会の事象から出発して豊かな作品世界へと展開する鏡花文学の生成について、新たな示唆を与えているということができよう。

注

(1) 正しくは、享年七十三である。

(2) 松村友視氏の御教示による。

(3) こうした状態はその後も改善されず、石川県が施設の風紀と衛生の向上をはかって、明治三十八年一月に公布した「救育所取締規則」に抵触し閉鎖を余儀なくされたが、県知事、金沢市長らの協議により日露戦勝記念行事として、救養場を卯辰山に移し、財団法人小野慈善院として再出発した（『金沢市史』現代篇下巻）という。

(4) 平野外善平『秘史　手取川』（北国出版社、昭45・11）参照。

(5) 『風雪の碑――慈善の父　小野太三郎』（北国新聞　昭41・6・25付）参照。

(6) 内田魯庵「新聞の発祥地」（『内田魯庵随筆集』下巻、昭16・11）参照。

(7) 山田博光氏「明治における貧民ルポルタージュの系譜」（『日本文学』昭38・1）及び東郷克美氏「泉鏡花・差別と禁忌の空間」（同、昭59・1）参照。

(8) 立花雄一氏『明治下層記録文学』（創樹社、昭56・4）参照。

(9) 笠原伸夫氏「『風流線』の行動原理」（『文学』昭59・11）参照。

(10) 横山源之助は同記事において「小野救養場にては士族は十人に七人強の割合」と述べ、「今日士族が如何なる運命にありや」はこの実状から想像できると言う。

付記　引用文中の旧字は新字に改めた。又、ルビは一部を除いて省略した。